

---

# 古代アメリカ学会会報

第26号

---



「ペルー・イカ県 サン・ホセの教会跡」(2007年5月撮影) ©馬瀬智光

---

## 目次

---

- ◆会員からの投稿
- ◆『古代アメリカ』の原稿募集
- ◆新入会員
- ◆研究大会のお知らせ
- ◆事務局からのお知らせ

---

2009年8月

\*本稿掲載文・写真の無断転載・複製を禁じます。

## 最近の研究成果

松本 剛(南イリノイ大学博士課程)

### ●「宗教の考古学」の実践

今から半世紀ほど前、英国の考古学者クリストファー・ホークスが Wenner-Gren Supper Conference にて、「考古学データの解釈は、社会のどの側面を扱うかによって、難しさの度合いが異なる」と主張しました。後に“推論のはしご (Ladder of Inference)” と呼ばれるものです。ホークスは物理法則が適用しやすいテクノロジーを最下層に、経済や社会・政治組織を中段に、イデオロギーや宗教的信仰をもっとも難易度が高いものとして最上段に置きました。ところが、直感的で、一見もってもらしく見えるこの考え方は、宗教的なテーマの考古学研究に対する悲観的な先入観をもたらし、その発展を妨げる原因の一つとなりました。現在、執筆準備中の私の博士論文の主な目的は、このホークスのモデルに反し、宗教の考古学を実践することにあります。

私が研究対象として選んだのは、ペルー北海岸のシカン遺跡です。ヘケテペケ谷河口近くにあるパカトナムーと並んで、北部北海岸における一大宗教遺跡として知られています。これまでシカンの宗教の解釈は、カウフマン・ドイグの論考に代表されるように、図像やエスノヒストリーへの偏重が目立ちます。つまり、様々なメディアに描かれるシカン神 / 王をカベヨ・バルボアが 16 世紀に記述した『ナイムラップ伝説』に登場する王朝の創始者と結び付け、その伝説の王への崇拜がシカン宗教の中心にあると考えられてきました。こうした一連の議論において考古学データが軽視される傾向があることに疑問を持った私は、行動考古学の視点に立ち、儀礼行為の痕跡そのものから、その意味を探ろうと考えています。

指導教官である島田泉(南イリノイ大学人類学科)率いるシカン文化学術調査団(PAS)のメンバーとして 2006 および 2008 年の発掘調査に参加し、シカン遺跡の主要建築のひとつであるワカ・ロロの西側墓地と、ワカ・ロロを含む四つの祭祀建築によって囲まれた大広場の一面を発掘しました。西側墓地からは二つの大きな墳墓とそれを取り囲むようにして作られた埋葬が出土し、埋葬完了後も約 500 年に渡って定期的断続的に儀礼活動が行われた痕跡が見つかりました(Shimada, et al. 2007)。ポーニャ(アルガロボの落葉落枝)やトウモロコシ、織物などを燃やした跡や、壺型の土器を埋めたもの、アドベで縁取られた竈、地面に掘られた炉、完全に解体されたクイやピューマの骨

群など、儀礼様式はバラエティに富んでいました。これらの儀礼跡が見つかった居住層が丰厚的河成堆積物に挟まれていたことは、儀礼と水との強い関連性を想起させます。また、大広場からは三メートル四方の大きな炉を伴う饗宴跡や儀礼用水路、(西側墓地と同様の) 燃焼儀礼跡などが見つかりました。儀礼用水路の存在と、その流れが通常の用水路のそれとは逆(ワカから川へ)であったことにより、ここでもまた儀礼活動と水の関係性が見て取れます。さらに特筆すべきは、饗宴エリアでは調理だけでなく、工芸品製作、ファルド(遺体の織物包み)の包み直しなど、複数の活動が同時期に行われていた可能性があるという点です。祖先崇拜の存在はこれまで埋葬と追悼儀礼の空間的な関連性によって主張されることが多かったのですが、追悼儀礼は必ずしも埋葬場所だけでなく、空間的に離れた場所で行われることがあるということを証明できました。また逆に、埋葬との空間的な関連性があっても、それが祖先崇拜儀礼であるとは限りません。埋葬後にワカ・ロロ周辺および大広場で行われた燃焼儀礼跡は、中期シカン期の埋葬よりも、洪水のような自然現象との関連性を強く示しています。

以上の発掘データをもとに、三月下旬にミシガン大学にて開催された Midwest Conference on Andean and Amazonian Archaeology and Ethnohistory にて、理論中心の論文を一本(Matsumoto 2009a)、4 月下旬にアトランタで開催された Society for American Archaeology の年次大会にて、方法論を中心とした論文をもう一本(Matsumoto 2009d) 発表しました。これら二つは一つの論文にまとめられ、年内にペルーで出版されるシカンに関する論文集に収録される予定ですので、上記発掘結果の詳細についてご関心のある方はそちらをご参照ください(Matsumoto in press-a)。また、7 月中旬から上野・科学博物館にて開催されている『特別展 インカ帝国のルート 黄金の都シカン』のカタログにも拙文を収録していただいております(Matsumoto in press-b)。

### ●地理情報システムの考古学的応用

1980 年代の前半にはじめて考古学に応用された地理情報システム(GIS)は、次世代を担う考古学者たちの間ではすでに基本ツールのひとつとして認知されはじめています。私はこの画期的な研究ツールの考古学的応用を「宗教の考古学」と並行して、私のキャリアの重要な柱の一つと考えています。今から 6 年前に修士論文の中心的なテーマとして取りあげて以来、フォトグラメトリーを使ったデ

デジタル遺跡地図の製作 (Matsumoto 2005) や最適経路選択モジュールのアルゴリズム検証のための歩行実験などに携わってきました (Kondo, et al. 2008a, b; Matsumoto 2008a)。修士論文では、GIS 応用における理論と実践のギャップに焦点をあて、その内容を 2005 年の秋にカナダのカルガリー大学で開催された Chacmool Conference で発表したところ、運よく出版用論文として採用されるに至りました (Matsumoto 2009b)。

現在もっとも力を入れているのは、(1) GIS 応用を考古学理論の一部として位置付けることによって、研究ツールとしてのゆるぎない地位を確立するとともに (Matsumoto 2008b)、(2) 考古学者の誰もが使えるツールとして普及させることに貢献すること、さらにはそのためのトレーニングシステムを構築することです (Matsumoto 2007, 2009c)。(1) に関しては下地が整いつつありますが、一部の研究者にとって、GIS の利用はまだまだ敷居が高いようです。地理学科にて GIS 関連の講座を受講した学生でさえ、実際に地理・考古学データを目の前にしたとき、それらをどう処理してよいか分からないことが少なくありません。こういった問題を解決するためには、「考古学者のための GIS 教育」が必要になることは言うまでもありません。現在、南イリノイ大学人類学科およびサウスイースト・ミズーリ州立大学外国語・人類学科にて新講座開設の準備を進めています。

## 【参考文献】

Kondo, Y., T. Ako, I. Heshiki, G. Matsumoto, Y. Seino, M. Takeda and H. Yamaguchi

2008a FIELDWALK@KOZU: A Preliminary Report of the GPS/GIS-Aided Walking Experiments for Re-Modeling Prehistoric Pathways at Kozushima Island, East Japan. Paper presented at the 36th Annual Conference on Computer Applications and Quantitative Methods in Archaeology, April 2nd – 6th, 2008, Budapest, Hungary.

2008b 伊豆・神津島における GPS フィールド歩行実験～第一報 (in Japanese: Preliminary Results of the GPS-Based Walking Experiments at Izu-Kozushima). Paper presented at the 25th Semiannual Meeting of Japan Society for Archaeological Information, March 22nd – 23rd,

2008, Doshisha University at Kyotanabe, Kyoto, Japan.

Matsumoto, G.

2005 *Pachacamac GIS Project: A Practical Application of Geographic Information Systems and Remote Sensing Techniques in Andean Archaeology*, Unpublished M.A. Thesis, Department of Anthropology, Southern Illinois University at Carbondale. (<http://gomatsumoto.net/>からダウンロード可)

2007 GIS Training for Archaeologists. Paper presented at the Finding Bridges Colloquium, August 31st, 2007, Department of Anthropology, Southern Illinois University, Carbondale, IL. (<http://gomatsumoto.net/>からダウンロード可)

2008a Availability of Least-Cost Pathway Analysis for the Study of Inka Road System. Paper presented at the 36th Annual Midwest Conference on Andean and Amazonian Archaeology and Ethnohistory, February 23 – 24th, 2008, University of Wisconsin, Madison, WI. (<http://gomatsumoto.net/>からダウンロード可)

2008b GIS in Archaeological Theory. *Journal of Computer Archaeology* 14(1):25–6.

2009a An Enduring Ritual Tradition at the Site of Sicán: From An Agency/Practice-Based “Bottom-Up” Perspective. Paper presented at the 37th Annual Midwest Conference on Andean and Amazonian Archaeology and Ethnohistory, March 21st – 22nd, 2009, Ann Arbor, MI. (<http://gomatsumoto.net/>からダウンロード可)

2009b Fill in the Gap between Theory and Practice: Making a GIS-based Digital Map of Pachacamac. In *Tools of the Trade: Methods, Techniques and Innovative Approaches in Archaeology*, edited by J. Wilkins and W.

Anderson, pp. 217-235. University of Calgary Press. (<http://gomatsumoto.net/>からダウンロード可)

2009c GIS Training for Archaeologists: Revisited. Paper presented at the Finding Bridges Colloquium, February 4th, 2009, Department of Anthropology, Southern Illinois University, Carbondale, IL.

2009d Sicán Ancestor Cult: Approach and Evidence. Paper presented at the 74th Annual Meeting of the Society for American Archaeology, April 22nd - 26th, 2009, Atlanta, GA. (<http://gomatsumoto.net/>からダウンロード可)

in press-a Sicán Ancestor Cult: Approach and Evidence. In *La Cultura Sicán: Una Visión Global*, edited by I. Shimada. Editorial del Congreso del Perú, Lima, Peru.

in press-b 新しいはじまりに向けて : 2008 年発掘シーズンより (in Japanese: Towards a New Beginning: Insights from the PAS 2008 Field

Season). In *Exhibition Catalog for "Precursor of the Inka Empire: The Golden Capital of Sicán," held at the National Museum of Nature and Science, Tokyo, Japan, July 14th - October 12th, 2009*, edited by M. Ono.

Shimada, I., G. Cervantes, C. Elera, K. Kato, G. Matsumoto, E. Mondragón and H. Watanabe  
2007 Organization and Variability among Middle Sicán Elite Burials in Peru. Paper presented at the 72nd Annual Meeting of Society for American Archaeology, April 25 - 29th, 2007, Austin, TX. (<http://gomatsumoto.net/>からダウンロード可)

---

---

### 『古代アメリカ』の原稿募集

---

---

会誌『古代アメリカ』第 12 号 (2009 年 12 月発行予定) に掲載する原稿を募集します。投稿希望者は、会誌に掲載されている寄稿規定、執筆細目をよくお読みください。論文原稿は、随時募集し、査読を終えたものから (原稿受領後 1 ~ 2 ヶ月で査読終了予定) 順次掲載する予定です。

投稿希望者は、編集委員会宛 (下記佐藤宛) にメールまたは郵便にてご連絡ください。編集委員会より、「投稿カード」を配布致しますので、これを提出原稿に添付してください。

なお、原稿掲載の可否は、規定による査読結果を踏まえて、編集委員会が決定します。

\* 投稿に関する連絡先 :

佐藤悦夫

〒930-1292 富山市東黒牧 65-1

富山国際大学現代社会学部

Tel : 076-483-8000 (内 2227)、Fax : 076-483-8008

E-mail : [satoh@tuins.ac.jp](mailto:satoh@tuins.ac.jp)

---

---

### 新入会員

---

---

2009 年 2 月 1 日から 2009 年 7 月 22 日までの役員会 (メールを含む) で次の方々 (以下、敬称略) の入会が承認されました。会員数は現在 172 名となっております。

- ・阿部 和俊 (あべ・かずとし)
- ・宮野 元太郎 (みやの・げんたろう)
- ・村野 正景 (むらの・まさかげ)

---

---

## 大会のアナウンスと発表者募集

---

---

前号でもお伝えしましたとおり（「2008年度総会議事録」をご覧ください）、2009年度古代アメリカ学会総会ならびに第14回研究大会は、**2009年12月5日（土）南山大学・名古屋キャンパス・B22教室**において開催されることが決定いたしました。今年度の研究大会でも、昨年同様、研究発表、調査速報、ポスターセッションを予定しております。発表時間ならびに発表内容は、以下の通りです。なお、発表時間には、質疑応答（5分間）も含まれますので、ご注意ください。

・研究発表：30分間。

・調査速報：20分間。過去1年以内に実施された調査の報告。

・ポスターセッション：研究大会会場の外でA0(841×1189mm)版のポスター1枚を用いて行う。

発表希望者は、研究発表、調査速報、ポスターセッションのいずれを希望するかを記し、題名と要旨（400字程度）を事務局まで e-mail、または FAX でお送りください。締め切りは、2009年10月1日(木)です。なお当日の発表時間は、発表者数により変更になる場合がございます。ご了承ください。

---

---

## 事務局からのお知らせ

---

---

### 1. 会費納入のお願い

2008年度までの会費が未納となっている方は、同封いたしました振込用紙でお振込み下さい。古代アメリカ学会は会員の皆様の年会費で運営されております。ご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。なお、2007年度以前にさかのぼり、会費が未納となっている会員につきましては、会誌・会報の発送を見合わせております。

### 2. 会報への投稿募集

『会報』第27号への原稿を募集します。研究随想、研究ノート、フィールドワーク便りなどテーマは自由で、字数は2000～3000字程度です。締め切りは、5月末日と11月末日の年2回となります。掲載の可否については、事務局にご一任ください。

### 3. 会誌バックナンバー販売のお知らせ

『古代アメリカ』のバックナンバーを1冊2000円で販売しております。購入をご希望の方は、ご希望の号数、冊数を古代アメリカ研究会事務局までお知らせ下さい。会誌と振込用紙をお送りいたします。なお、第3号は品切れとなっております。また他に残部希少の号もございますので、品切れの際はご容赦下さい。

4. 以下の会員の方々の転居先、及びメールアドレスが不明となっております。転居先をご存じの方は、事務局(jssaa@sa.rwx.jp)までお知らせ下さい。

近藤	優美子	会員
柴田	尚	会員
中村	真理	会員
渡邊	誠	会員
渡邊	光恵	会員

---

---

### <編集後記>

中南米の研究から遠ざかってかなりの月日がたち、ペルーを最後に訪れてからでも、早2年がたちます。今回、松本 剛氏に投稿いただき、読ませていただきました。GISの研究をされているとのことでした。私が働いております京都市文化財保護課（現在は埋蔵文化財調査センター）では、平成12年（2000）にGISを利用した遺跡地図の作成を行いました。私たちの場合は、研究成果の蓄積に重きを置いたものではなく、当時何万件にも及ぶ土木工事に伴う発掘調査の届出を都市計画図とリンクすることで、同じ場

所を誤って発掘調査を指導することのないように、また、周辺の調査履歴から建物建築や開発行為をする場合に発掘調査になる可能性がどれくらいあるのかを、相談者に答えることを目的としていました。

GISには様々な可能性があるのだと改めて感心しております。ただ、私たちがGISを作成した当時、調査団体ごと、研究者ごとに調査目的や手法が大きく異なることから、行政として求める情報が報告書に掲載されていない、そもそも報告書自体が刊行されていない、刊行までに著しく時間がかかる場合が多々あり、即断、即決を求められる

私たちの立場（あくまで行政の立場として）では全く役に立たない発掘調査が横行していたことも事実です。例えば世界測地系の測量データがあっても敷地内の調査区位置図がない、必要な断面図が掲載されていない等々の問題がありました。つまり、GISに入力する必要なデータがないという事態に陥りました。

調査の実施に際しては、中南米各国で文化財保護に携わっている行政機関が必要とするデータの提示を最優先に考えていただければ幸いです。また、日本の文化財保護法に限らず、各国の法令においても「国民共有の財産」、「人類の遺産」等の文言が書かれていると思いますので、発掘調査成果は人類の過去を明らかにするための共有のデータであることを心の片隅に置いていただければ幸いです

（そもそも論文に著作権はあっても記録保存した遺跡である発掘調査報告書に著作権は存在しないはず）。

（馬瀬智光）

発行 古代アメリカ学会  
発行日 2009年8月 日  
編集 馬瀬智光  
古代アメリカ学会事務局  
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1  
国立民族学博物館 関雄二研究室気付  
電話：06-6876-2151（代表）  
Fax：06-6878-7503  
E-mail：jssaa@sa.rwx.jp  
郵便振替口座：00180-1-358812  
ホームページ URL <http://jssaa.rwx.jp/>